

かつて私は小説「許浚」(李恩成著)を読み、深く感動しました。主人公は韓国の実在の人物・許浚(1539 - 1615)ですが、身分のために蔑まれ、逆境に揉まれながら、苦境を乗り越え、名医となりました。その後ドラマ「ホジユン」(1999年制作)を見て、魅了されました。要するに、「ハマリ」ました。それ以来、韓流ドラマの時代劇に夢中です。と同時に、隣国でありながら関心が薄く、親しみを持ってこなかったことが恥ずかしく、申し訳なかったと思っています。

さて、韓流ドラマの時代劇では王の背後には「日月五峯図」の屏風があり、両班や富裕層の男女は見事な書や花鳥図の屏風の前に座る場面があり、書画を愛する韓国の歴史を感じます。最近「風の絵師」(2008年制作)を見ました。李王朝後期に、双壁をなした実在の絵師、キム・ホンド(金弘道 1745 - ?)とシン・ユンボク(申潤福 1758 - ?)が主人公です。彼らの残した絵画が国宝として残されています。この二人は、過酷な運命に翻弄されながら、王の命令にも応える絵師として生きなければなりません。様々な謎と美と暴力が絡みながら、展開していきます。



金弘道 『檀園風俗図帖』(1780年頃)



申潤福 『端午風情』

ホンドは陰謀によって左遷させられていましたが、中国に献呈する絵を描くよう、宮廷に復帰を命じられて、見習い絵師の天才ユンボクと出会います。枠にはまらず、奔放な絵を描くユンボクは、絵師の父が、ホンドが巻き込まれた同じ陰謀によって殺されていました。孤児となったユンボクの才能を確信した養父が絵師にするため、男装させ、男として育てました。

宮廷、権力争い、陰謀、復讐、秘密、と謎を招くお定まりの筋書きが、波乱、サスペンスを呼んでいくのです。ホンドはユンボクの才能に舌を巻き、二人は師弟となります。ユンボクは親の仇を討たねばなりません。それを超える芸術への狂気のような激しさがホンドと一緒に火花を散らします。ユンボクは男であり続けようとしませんが、密かな女の思いも芽生えます。

貴族階級の人々が、絵の主題、構図、配置、意味を象徴する人・物の姿形、色彩、顔料、紙をめぐる、鑑賞し、評価を下す姿、また、テーマを与えて競わせ、それを賭けの対象にして、利益を得る、等々、興味深いものがありました。絵に描かれる人、絵で支配する人、絵で儲ける人々の生々しい姿があります。当時の厳しい身分制度、男女差別、金権への執念、恨の思いも感じます。史実は不明なのに、残された絵によって、謎解きのように、二人の絵師の波乱の生涯を描き出すとは凄くと思わずにいられませんでした。

師弟として信頼しあふ絵師の人間味あふれる真剣な姿も美しく描いています。このドラマを見て、是非、朝鮮、韓国の絵を見てみたいと思いました。宮廷の要請に応じて描くばかりか、その時代の庶民の姿を写実的に、躍動的に描くホンドの絵、常識を破っても真実な姿を艶めかしく描くユンボクの絵は、自由さがあり、伸びやかさがあると感動します。